

原理論の方法*

お ぼ た み ち あ き
小幡 道昭†

2001年3月21日

1 原理論の適用方法

歴史的方法による旧段階論の行きづまり。マルクス主義は本来、内部崩壊論が根本。市場社会主義者や労働全取論者など、倫理的価値判断に依拠した社会主義者を徹底的に批判。その発展のうちにその限界が現れる（果報は寝て待て）。

宇野はマルクスのこの資本主義像を倒立した。純粋な資本主義は自立性をもつ。限界は現実の資本主義が、この純粋な資本主義から乖離するところにある。

しかし、主観的な価値判断による資本主義批判は最後まで排し、客観的発展過程のうちにその限界を指摘するというマルクスの基本線は踏むはずさなかった。（逆に価値判断的な姿勢はイデオロギー批判というかたちで強化。政策論も政策の歴史的根拠を客観的に解明することが目的。政策提言型の政策論を批判）。

崩壊論や没落論から手を切ることは、あらためて価値判断の視点をどこかに導入せざるを得ないことを意味する（よい資本主義と悪い資本主義）。もちろん、宇野はイデオロギーが無意味であるといったのではなく、それはそれとして、独自に基礎づけるべきであると考えたのである。主体性の問題。

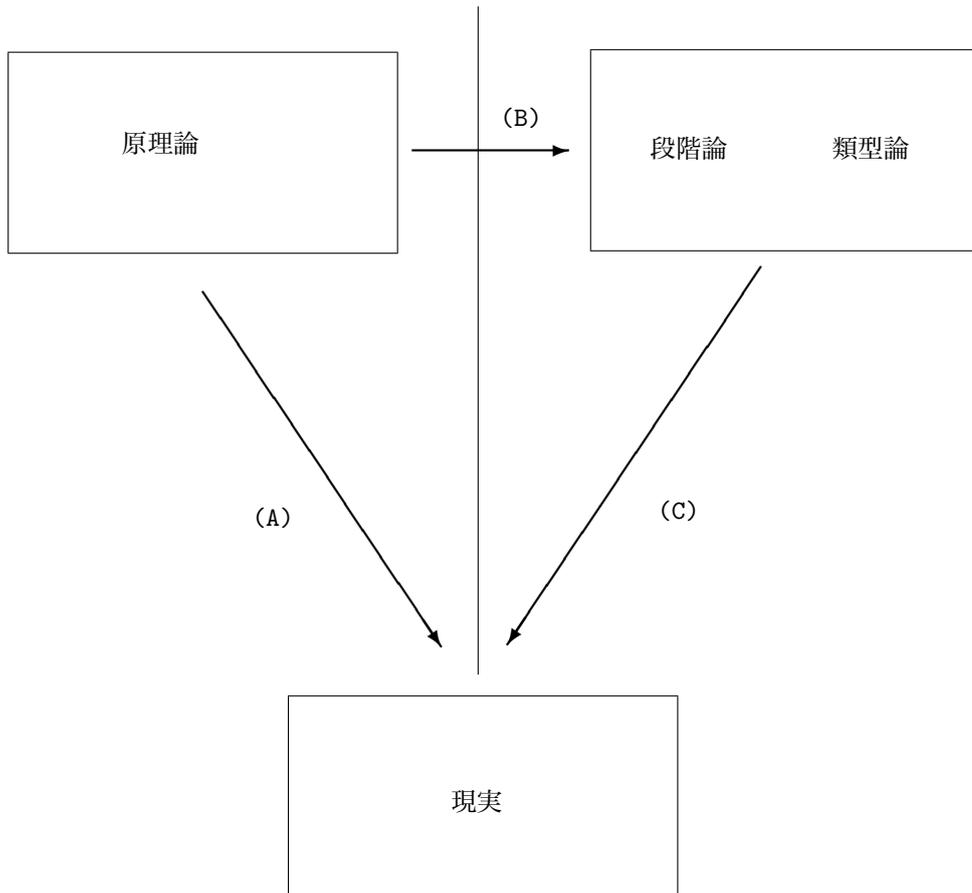
資本主義の生成・発展・没落という図式が簡単に適用できない今日の資本主義。現代のマルクス経済学の辛うじて抛り所となっているのは、資本主義の多様性という認識である。ここまでは従来の経済学の枠組みで何とかできる。なぜ資本主義はさまざまな型をもつのか、という課題。

資本主義は歴史的に変化し、また異なるタイプを併存させきた。これに対して、単一の原理論を構成することの意味はどこにあるのか。資本主義が資本主義である以上、その一般原理を解明する単一の体系は、資本主義の歴史的変容と多様性の解明にどのように適用されるべきなのか。

歴史的発展段階論に対して、近年、多様性に焦点を当てて、もう一度原理論と段階論を類型論、中間理論として再構成しようとする動きがある。この場合、原理論は二重の役割を担うことになるように思われる（小幡道昭「原理論における外的条件の処理方法」1999年）。

*Ver. 0.1, 2001年3月「マルクス経済学の現代的課題」春期合宿報告

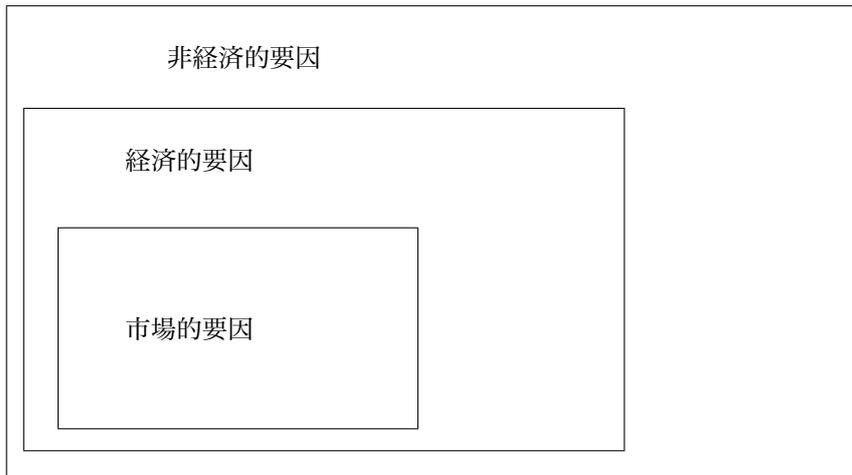
†東京大学経済学部 obata@e.u-tokyo.ac.jp



2 原理論と唯物史観

資本主義の多様性を捉えるうえで、鍵となるのは非商品経済的要因。この問題は、実はやや旧いが、多くのマルクス経済学者は唯物史観の通念に支配されている。しかしこの点は整理してかかる必要がある。外的条件とは何か、ただ羅列したり形式的に整理するのではなく、構造化する基本はどこにあるか。

1. 市場的要因に対する非市場的要因
2. 経済的要因に対すると非経済的要因



3 原理論の展開方法